

〈4.26 チェルノブイリ原発過酷事故 35 年日韓同時記者会見文〉

原発(=核)惨事は終わっていない。チェルノブイリを越え、福島を越えて全ての原発=核を廃棄しよう！

日本の福島汚染水放流決定で韓国全体が怒りで沸き立っている間に、私たちが忘れてはならないもう一つの原発事故=核惨事の日が近づいてきた。1986年4月26日、チェルノブイリ原発4号機が爆発した。それから35年が流れた。しかし、人類は原発を放棄せず、今も世界各地で原発が建設され、再稼働を準備している。世界最大の災難、チェルノブイリ35か年を迎え、アジア共同行動(AWC)韓国委員会と日本連絡会議は、改めて、すべての原発=核の即時廃棄を主張する。

チェルノブイリは2011年から観光客にその一部を公開し、最近では米国ドラマの人気に便乗して観光客が急増し、惨事が收拾されたかのように映し出されている。しかし、実際には依然として人が住めないほどの放射性物質が検出されており、石棺に覆われた原子力発電所もまた放射能漏れや再爆発に対する監視を怠ることのできない状態だ。そして、それがいつ終わるか分からない。

チェルノブイリ原発=核の惨事は旧ソビエト連邦のウクライナ地域で起きた単なる事故ではない。広島と長崎に投下された原子爆弾の途方もない惨状を経験して以降、人類は「原子力エネルギーの平和的使用」という名で発電用原子炉の開発にしのぎを削ってきた。だが、これは東西冷戦時代に繰り広げられた帝国主義戦争で恐るべき破壊力を持つ核兵器の原料であるプルトニウムを生産するための手段として開発されたに過ぎなかった。米国とソ連に代表される両体制は、宇宙技術と核技術で優位を占めるための熾烈な競争とともに、徹底した秘密主義と無謀な実験、制度的な否定、対外的な扇動を文化として定着させた。そうして50年代以降、数多くの核実験と原発事故は隠蔽され、科学技術に対する過信と権力の傲慢さは互いを育ててきた。

チェルノブイリ核惨事はソ連官僚の絶対的な命令と暗い現実の間隙が生み出した、執拗な秘密主義、自然の失敗を矯正しようという大胆な夢を実現させる手段だとして「原子力」を絶対化した科学技術界の傲慢がもたらした惨劇だった。アインシュタインですら、自らの相対性理論が死の核兵器を作るのに利用されることを予測できなかったように、科学技術文明は集団知性による統制と管理から外れた瞬間に、恐るべき災いになりうることを如実に表した。「原子炉は絶対爆発しない」という信念で住民に避難令を下す一方で事故の隠蔽に集中したソ連の官僚や専門家のような人間が今はいないだろうか。巨大な災難の前でロボットも先端技術も使い物にならず、ただシャベルやハンマーのような道具を持った人間だけがより大きな惨事を防いだという事実を今はみな認めているか。チェルノブイリと福島の原発事故の收拾作業に臨んでより大きな災いを防いだのはショベルとハンマーを持った平凡な人々の犠牲と献身だった。福島原発事故が示すように、人間によって統制される核兵器よりも、地震や津波などの自然災害の前に無防備に露出した原発がはるかに危険だ。さらに、帝国主義戦争や局地戦などで、ミスであれ狙ったものであれ、ミサイルや核兵器が原発を直撃すれば、その災いと惨状は想像すらできない。

チェルノブイリ原発事故から35年経った今も、世界各地で新しい原子力発電所が建設され、再稼働を準備している。核拡散禁止条約は米国など既存の核兵器保有国には適用されない。核武装で世界の覇権を振るうアメリカ帝国主義は、今では日本の福島汚染水の放流に対しても「感謝する」と黙認している。これは、米国の核の傘の下に日本を縛っておくための方便であり、米国がまず核武装を放棄しない限り、核兵器生産を念頭に置いた世界の原子力発電は続くだろう。これは、再びのチェルノブイリ、再びの福島での原発過酷事故はいつでも起こり得るという意味だ。人類は35年間、「原発と核兵器」に対するいかなる一歩も踏み出せなかった。原発は増え、自衛的核武装論は力を得ている。今は韓国もその隊列に合流しようとしている。

私たちはこれから、福島汚染水の放流を阻止するための努力に加え、すべての核(=原発と核兵器)の即時廃棄のための国際連帯と闘争を始めようと主張する。「核(=原発と核兵器)」は人間の統制から外れた死の物質であり、時間と境界を超越する災いだからだ。人類がともに力を合わせて核と戦争のない世界を作ろうと決意しない限り、チェルノブイリと福島は現在進行形であるほかない。チェルノブイリ原発事故は、その原因が不可避な出来事であれ、ミスによることであれ、凄まじい結果を生んだ。地元の人たちは大切な生活の場を失い、多くの人々が犠牲になった。そして、残された人々は放射能被爆による病気の中で、その後に生まれた生命は不明な障害と疾病を抱えて生きていかなければならない。スリーマイル・チェルノブイリ・福島の原発事故のほかにもどれほど多くの事故があったのか分からない。しかし、これ以上の沈黙と幫助は壊滅への道だ。原発を稼働する米国・中国・韓国を含むすべての国は、放射能物質を含む温排水を絶えず放流していることを認め、日本と大差ないことを認めよう。今日から一日も早く、壊滅ではなく皆が生きる道、すべての核(原発と核兵器)を廃棄する決断をすることを求める。

2021年4月26日 チェルノブイリ核惨事35か年に当たり

アジア共同行動(AWC)韓国委員会、アジア共同行動(AWC)日本連絡会議